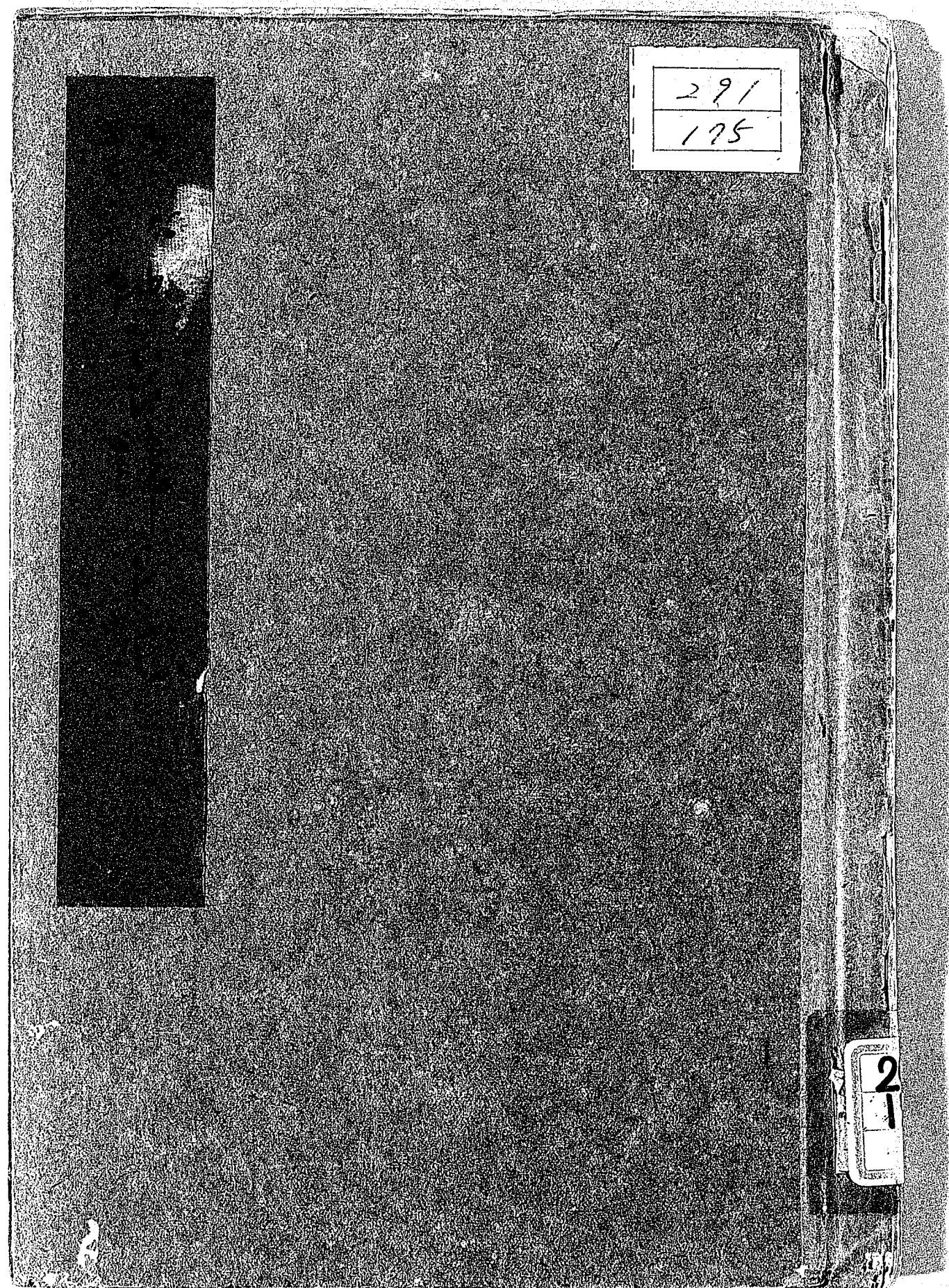




291
175

2
1

全永
地震
津浪
死

291

195

21

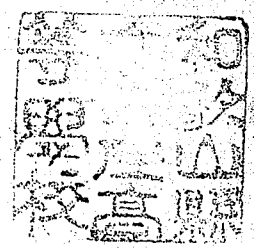
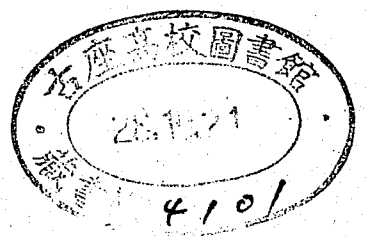
291
125
1

中根 郎
氏寄贈

山内重賢
金永世
五十年六月廿日



藤島神社所蔵



奉納御齋前

宣永四年丁酉閏午の下刻はかり又ふりて山々
つれ地しきけ寂るもまたふりて人みみ所をけ
あちやあちやけりかろ所一柄御子人夢浪よせま
山内やの家る共しく見ふかこ古おもふれうせけ
東君男女共ありさまを度てあをとおる海つり
高浪二尺三寸来たれ述よ通しと今もあやきけ
て千ももよあなふりあす山岡子けりのけり
けねい我もさる人みみくれいと財をあんとなす
井つり山つりいふ所もあけのけり若ふきの聲も
さきの声もあけのけりおさふはりてあやき

リワシかもあれと川よりこまへに浪と来らす家
にあらまたすなだるなりこそ有かしくおほし
けれ

彼山にありつるほどおまへのかたより見ゆ遠く海つら
き見侍りし小瀬島の沖より彼山を五つおつ重ね
おけたらおぼし浪立ち来る中より白く圓くおぼし
ありけるもの見えければおやしく目にはあたすとい
か見えしはかきと見ゆるは浪神より人とは二つお
あれ又おまへ東のかたより小瀬島は海よりおまへ
おまへ見ゆるよりおまへ浪のうちにおかきつれおま
へがおまへの沖あたりにおぼしき所より浪をまたれ
おまへの沖よりおまへよりおまへおまへおまへおまへ

かりしことありける事おまへおまへおまへおまへ

是則小瀬島は神神いさかろたかかとおまへおまへ
おまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへ

おまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへ
おまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへ

春日野の中より第一のは段はあり

又おまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへ
おまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへおまへ

又其後と仰さる事又三十分世界のありし
編蓋大蔵王の言化と云ふ利を盡す書の方便にけん
あらふやめいたくすゝかすゝと誰の人かこれに信し奉ら
ずらんや かくてやはかすゝと小指み奉るゝと隣者の千
代りかけり多々言のさかかくす忍びきゝゝゝと云え侍
りたり

重賢

重賢

仲津浪わたりけり 衆のたまり地の 洋すゝみみ
衆今とや浪とあれば 衆のたまり地の 洋すゝみみ
海のと衆もとるさふゝとや 衆の浪のさふゝとや
はつばくたけし 衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

くちやすゝ衆のたまり地の 洋すゝみみ
六月一日 衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

衆のたまり地の 洋すゝみみ

蘇島印社

盡承承七年甲子大地震降殞三死

霜雪

解 大地震海啸記

安政二年乙卯五月五日
祥日

女
技
師

十望屋併社

南島圖繪徵事 并序

無代源荷

生健歲

昭嶠才華

大正 九年

山崎喜久

牟川精四郎

山内倭奇

王邦元

志摩手記

宏本平老

本林 貞男

池田昌新

親事

糸川柳四郎

衣更師

志摩八重門
新左衛門左衛門

梅澤翁自年長壽終中三十八歳公認二年（五月）
五月大起云云津波此始九月ノ東豊雲、細ハトア、是ナリ

嘉永四年 幸大地岩津浪之記

六月十五日 今同照

天曉旦上刻

俗間ニ十四日
初ト云フ同シ

大地岩

云々人々起ヤ出テ家ヲサシ大ノ騒クサレト云々事ナリ後ナ五

ヤ同ニ三四度ツ日ニ云々此時強風同リユ一々解テ因ニ

日市大和國屋良信等ノ因上野等諸ノ甚シク大ニ災起リ

地裂ケテ人ノ影シナリ云々臣國ノ陰景ナリ見例ヤリ

十一月四ツ日云々星天辰ノ下刻大地震云々事

細更々々家ヲ出テ道路ニ立ツ所々ニ止ム其後晝夜

ヲカケテ四五度云々人々日初ヲ渾ノ砂水行々事ナト早

々海田ノ磯須臾ノ間ニ見エ工隠レシテ砂礫ナリ砂ノ寺修スル
カハル事ナリ

事タカニ云々八度也サレハ行ハサナリ
カハル事ナリ此日勝車井井ノ役傳

海ニ出テ砂ヲネアリ見レシ云々云々オホエテ井ノ水

二太々皇ナラニ 聊カ鱗キニナリレヨト 強ク 姑少ノ事ヲ
 ニニ津浪ノ常ニ来シニ所ノ難トシテ 風海ノ國ノ女衣食調
 子ヲ授ニ送シ 精也山 是也・葉ニ在マ トリワヤチカシ ト述テ 登ル 貴ニ入
 王子宮 ヤ道村ニ在リ 稻葉宮 有道村ニ在リ 秋葉宮 美臣村ニ在リ 桑島宮
海ノ中ニ在リ 等ニ津浪ヲ上テ 人々參訪ス 是レ 彼中津浪ノ常ニ
 来シニ近キ國ニ、通シ 為トシ 人皆身繫ニ 為テ 山ヲ名ト
 飯ノ炊キ 年節ハ月三ヲ為

十一月五日、奉_レ命、心々入ル。昭文軍付大坂を展ニテ事甚
しうおれヲ出ス道故ニ立ツニ之ヲ棄テ二口フ、奔リ予預使トシテ
海懸鳴鳥ヲ陣ニ渡ル方ヤキナリ、有邊村、脚ニ之ヲ一橋并電
格物、往來ノ道アリ限リ、山口村ハ半内ニシ、山形ヤナ
河辺、田ニ氣難、其外ノ海岸トモマ控セタリ、石階一段墮リ、塩田村ハ
折々事雪ノ如シサ、列ナ名付ハ平常ノ波打原ヨリ澳

へまの事いふに叶はかり又家来より如斯くも事三夜
 大なる三夜フレドモホリキハナリ猪鼻山上ニ見
 有る及ヒレトヤナリ二ノ上
 下見一岡蓬所法華寺、岡や道村ニ在リ字、郷中
 へ人逃上ル己レハ法華寺、岡ニ居明ス今宵ハ後覺分
 為不ハ霜大ク深クシテ衣ヲ沾レテ堪ニ難シ其下利又之
 地を震ユ事甚シ終夜ハヤハ敷ヘテ元々工ル日知
 者コト劇シム事ナキ
 ハヤ又何トウイハ津浪古きノ言ハ師ニ升ハ水ヲ引トイフト云フ故ニ降
 ル高ノ家張ニ升ハ水ヲ引サレバ濁リタリ又波ニ乗ル
 ニ云ヘル如クシヨヤメルイナレハマノミ遠ク出レハ及ハカリトイフト是カハ
 カリレ故ナリ、如キ有リトモ後入心ラエズマカラス又其時ハ平穩ナリツ
 ド津浪ノ付渡、舟中多木アタフト海ヤイデニ云流レテ家ハ断田村
 又更テ河川レタリレ井ニ木海キ出ツニ云流レテ家ハ断田村
 ロ重正ノ家、又嘉永、泰平治、有セ、相成セテ一家ナリ又右方
 山内村ニア海邊陸長門ノ家、風雨ニ去ル多ク家断ナリナリ又右方
 ナリ傾キ多ク家又ハ傾キ、我等皆レ身ハ保矢ヤレナキ事

モアム、田畑、義山内村ニテ床土流失矢作土流失入
其ノ合テ四町人未麦作損亡廿町余東家什村ニテ作土流
失五及五畝人未麦作損亡二町四畝五畝人餘西家代村
ニテ作土流失一及三畝人未麦作損亡五町七畝餘堤田村ニ
テ損亡二町余合計里村桑屋石碓等原ノ辺ニテ此土流
失一及廿町ナリ又風濤ニテ漁船漁網等ハ流失下り又諸
日ニ埴田村ニテ枇杷山ノ枇杷ノ樹幹等花レタリ陸浪ニ
沿リシユ上ルヘシ然レド地帯ニ積コレハ甚穩ナリ

各地部 名 水新平 穂 工 工 ヨレハ 宝永四年 当新平
 以 十月四日 津 浪 時 播磨山 ヲリ 見シニ 麻呂ノ 山ヲ 云
 六ッ 重 上ト 名ハカリ、 大 浪 大 津 ヲ 糸 ヤ 末 々、 其 浪、
 中ニ 白ク 圓ニ レニ 妙 ナ 莫ク ア ン 物 有 名 ヲ 奇 シ ト モリ 見

ケル、彼、大塚ニツ、ワレハ、キ方ハ、
 方、エタニ、カノ、老リ、知、方、
 養、神、思、フ、ア、リ、ヨ、
 又、是、世、神、ハ、
 也、也、
 大、高、日、
 花、大、
 原、島、
 其、先、

新度モ同シ神ノ守護ニヨレンナリ其役殿ニ申刻彈張
シトレン 力カリ未申ノ方ノ海上ニ火柱タハト見エニ急遽浪
 奔セシムルヲ猪島山猪島山 嶺ノ四目四目ニ飛飛ケ登リシニ、ニ見エシカノ丈
 浪澳ヨリ山帝セ来リ奈島ノ帝山ニアタレルカ丈煙ノ音シ
 シニツミワレ御ノ哀哀ノ時ノ如ク丈ハニ分レ丈ハニ田辺海

トユキムヤハ海に二ホセツテ殆レリ在リ石ノ神山ヨリ
神火カミ大カ遠見トモ瀾出ニ海上ニ山カヒ守被レ玉事終ニ礎
ヲ

是未甚 本時ノ公文所通稱
建武トモ 言フ明日ハ軍ノ免定 貞觀ノヲ父ハミタシ
作意

今日世所ストテ興リ村ニ 日村ノ村長無原リ遊幸正、寺田村仲部、
寺田村遊幸正門、開成島ノ村清吉門等

ナリ行ニ陸者ト云フ者ノ案ニ休息居シニ申時ハカリ大地震

ユリイダシ大地ニ裂レ計リナレバ大ニ驚キ家屋ノ半古ラ思

ヒ頗チシリ返サレセレカ友ノ公引然テオクキニ有テ云ハイカハ

セント進退ヤコリ途チニ導レシカ命ガ珍事ナレハ猶豫ス

ニキニ有テ大ニ大友ニナレハ難ニモ公用ナリテ餘フニヤ降ニ

アラジト決レテシリ返レニ村長ノ中ニ人々出由フトワラタノ田
辺ニト行ナ残レリ人々周章ヲタメキヤカラ已レテ神佐ヲ降リ

シニ憫リ甘ノ溪溪ノ傍ニ辺ニテ大砲ニ三基セレカハキ音響

シヤイナヤ然ハ川ノ津浪浜流リキテ向股ヲ破スバカリナレハ

往來ノ道ニ行キカタク餘神ノ社ニ片方ノ山ガツツニ平

見 原田甘ノ
丘山 軒エニ臺所 海田ノ側ノ 出レニ板板ハ湖水

溢レテ海ノ如ク遊散ノ人々叫喚夥シク如クアハ己カ家ニ

既ニ派レ矢セツテ甚シ長息ニ出テ立ニテ歸リテ家

居ハ此ニ更ニ彼更ニ夜ニシユリ 預ノレトカセル事ナリ家人

ハ既ニ猪塾山ニ逃テリ 六日晨ミ行ニ見シニ雨霞タニナレハ
藩國ニ相イト深ク遊ニ雲氣甚シシ母

ヲ始ニ妻子ノ濡ンボテテ居レサセ 目モクレニモキ正テイトウナレキヤ

ナリキ又猪ノ山ノ後居ニ同座セレハ鑑木角ニ助業内、山和元孝業内、後兵

初家内、其外子等皆驚ニ者レモ合セテ 平穩ナリハイトク、ウレモ

カキキ目ラハ官ノ旧尼皇親ヲ始ノ家屋重署ヲナラシ

タノ本寺ヲ如面ニ小屋ヲツクリテ居タリレハ古来未嘗有

ノ事ヲキトカクナ

同宗ニ十一月十二日精進山ヲ歸リテ後再ニ後國ニ
復舊ヲウリ理安政二年ノ冬冬ニテモ婦人ニ
子ハ其妻ニ復舊ナリ

十一月六日幸未名晴天晴霜相除ナキ雪ハ精進
山上候方見ノ岡、諸事ナキ、岡等所々々屋ナリ、
三ノ田島東作家内方渡、今日モ小地雪敷ナキ今宵
ニ神火現レ候、今日岡ニニニ村、地土鈴木村、
皆養村口前所ニ出役レテ在リ、津浪ニ溺レ死
スト後十餘日ヲ經テ屋海濱ニ寄レリトゾ

十一月七日壬申戌日雲天今朝岡ノ五日ノ夜ナキ、廣
ノ王子宮堅クサレ名鑑自然ニ用ヤ、此所ヨリモ神火

現レ火火川口ハ王子ノ半腰ニ懸リテ守獲アリ、又
々々同ケリ今日モ小地雪敷ナキ

十一月八日九日、十日、連日候、十一月十一日午時ヨリ
家ノ内リ又然レド猶雪有ヤ、人多ク寒ク列ハ、
晦日カク、八日ヨリ後、十日、十夜セハ、
第一候、十二月末ニ、一二夜ヨリ、
ス、二年正月五日申時ユリ、モ時々ユリ、四月ニ至リ、
モ猶小地雪ナリ、
古麻島、守守獲、然ル事ハ、上ニ云、
祝又五日、日、皆養、
四、右リ、
リ、
船モ平、

又十一日頃ニ有リシ 岡崎松樹 通称 桑島之濱
リ糸紡ヤレニイナキ 神殿ニ至然ラデモ 傾キ必カ
様ナルニ云ハカリモ カタカデ在リレト強レリ又ナカ
郷中邦礼集リルニ云モ 境田村ニ桑島宮ニ 櫻社
四ノ坪ニ在リニ参リシニ此所ノ 長老イトナキ石葺ノソコ
タルガ上ニ木ノ房ニ集リテイマカノ風ニモ吹キオトサレ
ヌベキサマデカ 近隣ノ人家ニ聲ヲフレ 石ニ落葉モスコシモ
カチズ在リキ此ヲモテモ 女神ノ 瑞穂成イトクカレコウホ
エハベリヌ
十一月廿五日 寒陰日雪天ニテ雨降ル 海彦鳴キ動シテ
懸を根ヲ吹トバシ 雷鳴ル
十二月六日 郷中瑞雲宮 桑島宮ニ 瑞ルノ萬度

ム考リテ

又例年四月朔日 明神降ト称テ 御年ノ人 桑島
ニ降リ参訪スルヲ 翌安政二年ニ此は神トモテ村
々ヲ 悔テ 献テ 若キ人々童兒又 相授人 海彦ノ身
人ナドハ 殊更ニ 衣裝ヲ テラシメ 祝ウケツ 祈リシハ
イトノツラシク 近在近郷ヨリ 群衆數千人ニイ
イトニギハハシヤフトナリキ
十二月十四日 申名 昭王 海彦鳴キ動ス
安政二年二月廿七日 桑島宮ニ 雨天ニ桑嶋ノ 湧き湧行
シ事ニ 人々 海彦ノ 子トナシ 大ニ 騒キツレド 無事
海彦ノ 後海彦平 常ヨリ ニニ又高シ
因ニ云 大地宮ニテ 山中 霧搖ヤレニ 霧極ヤレニ 大

山内村
上
谷口
村
山内

又西屏社

村地震ハ屋ニ入リ
 名ヲ男ニシテ
 新ク買セ
 正月

病同村夕ミ谷ノ家ニ入り一人ニ病ヲシ
果モ相至年三月病死又

切目紅櫻川村に於て一二人、海苔賣ひせしヨレ
是六年の
に先ス

上気墨村ニテ今右取門トイフ者一臺子咄囃ニレタ

リユキ等（千倍）をせりしと云ふ。不心な人。病者程候と云ふ次第に治

ル下 必ス大伏 暴鳴 千んんん 所 華ヲ 吾亦 則ニ 伏鳴 云云 詠

丁卯二月二日

二、五、七、九、十一、十三、十五、十七、十九、二十一、二十三、二十五、二十七、二十九、三十一、三十三、三十五、三十七、三十九、四十一、四十三、四十五、四十七、四十九、五十一、五十三、五十五、五十七、五十九、六十一、六十三、六十五、六十七、六十九、七十一、七十三、七十五、七十七、七十九、八十一、八十三、八十五、八十七、八十九、九十一、九十三、九十五、九十七、九十九、一百。

人々孫經、糧鹽、
名寸二二、
山下、
元、
なり、

汝亮シタル人々聖正月ハ豆餅ハ豆餅ヲ食
 ヒテ政事無キニ噤シヤ塔命スト云フ

古事カ見ルト人ハ強シトナギナシ又
能脱偏モ有リ又ニ

且前采芝考其ヲハズノ人々トハカリテ死レオクエ其ハ後人

ノ見ニ當リノ事實ヲ知リ神ノ靈恩賴ヲ尊ミアツギ

悟^レベキ^ニ爲^ルナ^レハ^ニ重^ク見^テモ^モ 澄^ミ見^テ 朗^ク亮^クヤ^スカ^ニバ^ク

鄒詞徑言，儘二書十以他國他鄉事若不見國

せんて、
張セシテ其傳聞、
誤謬モ有レクハ、

場所ニハ用アクレテ
 フト長クハザラハレケレハ
 船迄ニ至セテ

ハ
グ
フ
マ

安政二年己卯四月廿九日

鮭汁原藏鮓星花柳

又云

麻島、大神コノ島山、大神坐事イツノ、
イフコトタカニ知リオタケレドイト古キ事ト見エテ
上高桑佳美丸ニ奉

大正元年辛丑冬十月冬上天皇特撰大行天皇

大行天皇御幸紀伊国時歌十三首トアケ中ニ

三名部乃爾シホナミナノ塩真瑞カシマ麻島在カシマ釣為海々字見

幸来カヘリホ

ト見エタリ、大正元年ヨリ嘉永七年甲寅ニテ百

五十四年ニナレリ、麻島、大神、常陸、國、麻島ヨリ

始シテ島ノ名ニシテ其名既ニ言ヒナレバコソ其事

ノ供奉人ノ歌ニモ稱ンナレバ、麻島ト古キヲ神ノ移

坐シハ其名始ナバイトク上ナリ、神社トナレオボ

侍

こゝろに、その形を布きて、津波のよせたりしかと、麻島

の大神の御宇に、この島に、おたしと、多ひら、かみ

を、いとし、れり、く、あふや、か、み、大、後、戴、の、た、こ、と

や、の、ま、い、が、み、ち、な、り、ま、り、と、ま、こ、の、ま、の、ま、

の、ま、り、ま、り、

原繁星 無代

くさ、り、木、り、あ、て、か、れ、お、く、ま、も、月、の、つ、つ、か、の、日、お、か、ふ

つく、日、く、た、つ、と、き、し、た、い、か、ね、の、つ、ち、さ、く、は、り、あ、る、さ、り

て、お、ま、を、こ、つ、し、さ、る、し、い、ま、か、く、つ、れ、む、又、何、い、ま、の

あるに於て、その一は「のと」が二たをよきあひ

妻よやう家はたふれぬををいひちふなかりなりゆ

家計の経費と貯蓄の割合を大體に示す。

こは田圃のこまを
よめるなり

夢子奈
 切衣
 かけ
 仲一
 歌
 や
 下
 たり
 多
 分

老人のむろかたりの大浪をまきおはん

この書は衆生の心をたづねてみよといふ

ふ
いさかといふ
ふたつをみれば
いとおたやに

新書一紙官承以たぬしと云ふ事

す人評奔流のふりきるといふくふ

五古は新
神の又いふも
馬鹿の
か？
ふたふた
あはれ

又波をせまきおとすけの神代玉のミコ

[illegible]

みゑの海せる家乃めこれあらむカーこの神日す

547

ち

毎子三 山崎五右衛門

あらんやうな神のいふやうなことを人にいふやうに

「あゝおやうと云ふやうに」

たゞあゝおやうと云ふやうにからすゝと云ふやうに

うさぎ 寺本平三

神のいふやうなことをいふやうに

源正三 森田五郎

と名前の海にすゝたははらりてゐるやうに神のいふやうに

たゞいふやうにすゝたははらりてゐるやうに神のいふやうに

二五三 泉村五郎

「たゞいふやうにすゝたははらりてゐるやうに神のいふやうに

又神のいふやうにすゝたははらりてゐるやうに

三三三 志摩五郎

大はらりてゐるやうにすゝたははらりてゐるやうに

神のいふやうにすゝたははらりてゐるやうに

春芳 池田五郎

白たゝのいふやうにすゝたははらりてゐるやうに

と名前の海にすゝたははらりてゐるやうに

多田五郎 山崎五郎

たかたゝのいふやうにすゝたははらりてゐるやうに

かゝるやうにすゝたははらりてゐるやうに

源正三 寺本平三

神のいふやうにすゝたははらりてゐるやうに

ふりや明けりや

草枕かりぬきぬき明けりやふりやふりやふりや

源実朝 云井久孝

おろちねもさへせぬおろちねもさへせぬおろちねもさへせぬ
たふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

源実朝 同前

ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや
ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや
ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや

三ノ巻

ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや
ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや
ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや
ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや
ふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりやふりや

(源実朝 同前 三ノ巻)

石原村

陽球 四ツ子津浪ヨセ ムツニ人々お寄セ家ノ流失ニ二百餘

(川原イフツル) 八人段々下リヨレ田園大ニ流ル有

原海 五ツ津浪ニ民家大ニ流レヨレ然レモ此里ノ地土濱口

某陣懸念存ノ數千人をヲ救テ救フ又名アリト

或ス一ヤ事

日方 ムツノ津浪多ク所ニ寄セ家ノ流失ニ多ク

赤津ノ里 温泉止リヨレムツノ山平ニ平穩ヨレサレハサレヨレ

女取ニ 九月二日始ツカヨレ見ノ如ク浦出

北津登津 ムツノ家ノ流失ニ人々多ク

印南津 ムツノ里ニ有テ津浪大ニ流失

力日 平穩

周来見海 家七軒流失ノヨレ

大島勝海 人々不種流失

古登津 少シ流失破損ニムツ平穩ノ方ヨレ

三島 河ノ水大ニト甘カレクムツ津浪傳クヨレサレハ家ノ

多ク損レヨレト

尾鷲 千余軒ノ田セヨレ金軒流失ノヨレ

陽津 温泉湧出サレヨレ

他國見内ノ次第

東 イト平穩サレヨレ 地高四ツノカニサレト

大津 四ツ子津ノ里ノ流失大ニ多ク津浪本陸リヨレサレ

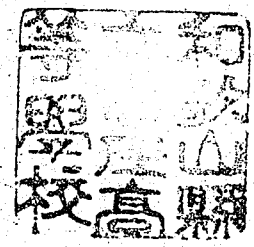
中宮 (係ニカキト) (ニタ失ノ如クニサレヨレ) (四ツ子津ノ里ノ流失大ニ多ク津浪本陸リヨレサレ)

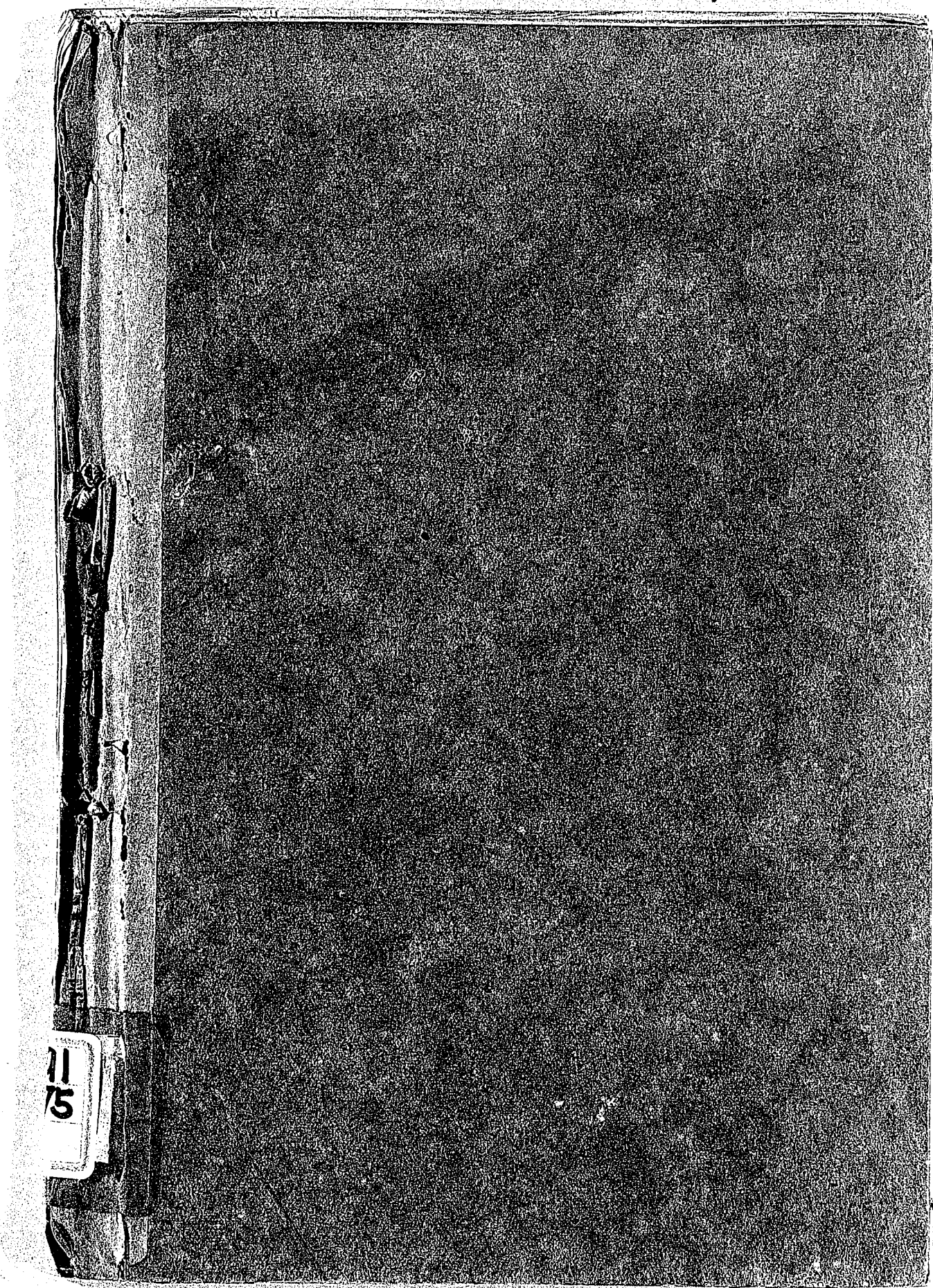
砂抜 船五ツノカキト (係ニカキト) (ニタ失ノ如クニサレヨレ) (四ツ子津ノ里ノ流失大ニ多ク津浪本陸リヨレサレ)

ハシフレノ拘セハツルヨレトツノ二月ヨレミ地高サレヨレ

右、外岡と事トモイト多カリマレト死懐セテ何テ荒々死
レヌ

(一巻)





1175